

アンテベラムの黒人文学と黒人民族主義

—*The Garies and Their Friends* とハイチ革命の記憶—

進藤鈴子

はじめに

最近の新植民地主義研究やマイノリティ研究の成果で、コミュニケーション研究者の間では人種問題への関心が再燃してきている。1990年代に言語学者、マスメディア研究家、修辞学者達がいわゆる“racial politics”の効果というものを研究しており、その延長線上で注目を集めている (Wilson 89)。中でもアメリカ黒人文学、特に、奴隷制時代の文学の掘り起こしや批評に関しては大きな成果があげられている。この時代の文学作品に対する関心は、公民権運動とブラックパワー運動の成果が結実した1980年以後のことである。それまでは、アメリカ黒人文学への関心は、もっぱらリチャード・ライト以降の作品が中心であり、その多くが現代作家、特に女性作家の作品であった (Graham 6)。こうした研究動向に大きく寄与したのがハーヴァード大学のHenry Louis Gates教授である。彼は1982年に*Our Nig*という作品がアフリカ系アメリカ人の女性によってアメリカで最初に出版された小説であることを突き止めている。また2001年には、あるオークションカタログで見つけたという古い原稿が、1853年頃から1861年頃に執筆されたことを調べ上げている。それは黒人女性の手になる最初の小説と思われ、逃亡奴隷Hannah Craftsの作であることが判明した。2002年にこの小説*The Bondswoman's Narrative*は出版され、ベストセラーを記録している (Wilson 91)。

こうした文学的潮流の底には、やはり、世界的な民族独立主義への移行があるのではないかと思われる。歴史や文学史がたった一本のスペクトラム (植民

地支配関係の延長線上にある西ヨーロッパの世界観)に絡め取られていた時代から、いくつものスペクトラムの交差する世界観が求められるようになってきている。様々な分野で、これまで抑圧されてきた声を取り戻され始めている。そのひとつが、奴隷制時代の黒人文学や黒人文化の再評価であろうと思われる。自身がパレスチナ出身者であったEdward Saidは世界の価値観がヨーロッパ主義で覆われていることに警鐘を鳴らした。ある民族がその自治を許されず、その文化も政治的圧力により抑圧されることの不合理性を説いた。そして、民族が本当に独立し認証を受けるためのひとつの手段は文学を生み出すことだと言う。サイドは『文化と帝国主義』の中で「国民とは語りによって創出されるものだ」と主張する。

As one critic has suggested, nations themselves are narrations. The power to narrate, or to block other narratives from forming and emerging, is very important to culture and imperialism, and constitutes one of the main connections between them. Most important, the grand narratives of emancipation and enlightenment mobilized people in the colonial world to rise up and throw off imperial subjection; in the process, many Europeans and Americans were also stirred by these stories and their protagonists, and they too fought for new narratives of equality and human community. (Said xiii)

サイドは被征服者からの文学、文学史、歴史の発信ということの重要性を説く。その一方で、20世紀初頭に始まる近代黒人解放運動の父、デュボイスは、「白人世界で黒人であることは、たんに個人としての侮辱や機会の欠如だけを意味するものではなく、このような不利の条件のもとで黒人がどれほど偉大なことをなしとげようとも、それが未来世界から抹殺されるのがつねであるということの意味している。というのは、黒人の行為を記録する歴史がないからである」(本田93-94)と述べている。南北戦争前、すなわち事実上アフリカ系アメリカ人がアメリカ市民ではなく、大半が奴隷という身分であったアンテベラムの黒人達には、語りそのものが極めて困難な行為であった。しかし、長く

等閑に付されてきたこの時期の小説は、実は、半世紀後のハーレムルネッサンス以上に、白人社会に対して挑発的で好戦的、かつ黒人ナショナリズムに根ざした作品を発表していた。本稿では、アンテベラムの黒人小説、その中でも、黒人の手による2番目の小説と言われる *The Garies and Their Friends* (以後、『ゲーリー家の人々』と省略) がどのようにアメリカ社会に発信し、どのように再生したか、また、どのように現代社会でひとつの歴史を創りあげているかを検証する。政治的、社会的、経済的に抑圧し搾取する強力な国家装置の内側に閉じ込められ、大量奪略の結果生じたディアスポラを生かされるひとつの民族、市民権を剥奪されたまま、個々の農園や大都市の片隅に分散させられ、結集して独立した共同体を作ることさえ禁止された民族の、集団的国民意識の創造という限りなく不可能に近い精神的営為を、『ゲーリー家の人々』はある家族の盛衰を描くことにより達成しようとしている。作品の潮流ではないにしろ確実に底流をなしているのが、物語の背景となっているフィラデルフィアという都市が歴史的に内包する自由への渴望であり、ハイチ革命への憧憬なのである。

『ゲーリー家の人々』出版の経緯

『ゲーリー家の人々』は1857年にロンドンのラトレッジ社から出版されている。イギリスではなかなかの評判であったが、本国アメリカでは何の反応もなかった (Gardner 6)。それから100年以上が過ぎた1969年、ニューヨークのアーノ出版がリプリントを出した。序言を書いた Arthur P. Davis は、「今の時点では、黒人文学を専門にしている学生でさえ、ウェブの名前を知るものはわずかだろう」と言っている。なぜなら、それまでに多少ともウェブのことを扱った3冊の研究書——Vernon Loggins, *The Negro Author* (1931), Robert Bone, *The Negro Novel in America* (1958), Hugh M. Gloster, *Negro Voices in American Fiction* (1948)——には、半ページから数ページしか説明がなかったからである。リプリント版が世に出る以前には、首都ワシントンにあるハワード大学に1冊、及び、英国博物館に1冊あるのみで、アメリカ国会図書館は所蔵していなかった (Davis 27)。

それから20年が過ぎた頃、図書館司書である Phillip Lapsansky は、『ゲーリー

家の人々』をフランクリン・ベンジャミン創設のフィラデルフィア企業図書館に購入しようとしたが、どこからも入手できなかった。イギリスの業者からやっと1冊手に入れることができたのは1990年のことであった。その翌年の1991年、大学では多様性の理論と実践を求める議論が沸騰しており、ウェブの人气が上がり始めたと報告している (Lapsansky 27)。

著者フランク・J・ウェブ (Frank J. Webb) はフィラデルフィア出身の混血 (以下、ムラートと呼ぶ) の自由黒人とされているが、詳細な経歴は分かっていない。彼は同じ時期に作品を発表した Frederick Douglass や William Wells Brown らと異なり、奴隷制廃止主義の運動家ではなく、いわゆる公人ではなかったことも影響している。しかも、彼が生涯で発表した長編小説はこの作品だけである。それに比して、同じくムラートの自由黒人であった妻のメアリは、朗読家として名を馳せていた。18世紀最大の悲劇女優として名高いイギリスのサラ・シドنز (Sarah Siddons 1755-1831) にちなんで「有色のシドنز」とか「黒人のシドنز」とか呼ばれていた。1852年の『アンクル・トムの小屋』以来、ハリエット・ストウはいろいろな局面で北部の自由黒人達を支援していたが、1855年の夏、メアリの朗読用に『アンクル・トムの小屋』の一部を『キリスト教徒の奴隷』と題する戯曲にした。ウェブ夫妻はアメリカ北部の朗読公演を成功させ、1856年にはイギリスにも渡った。市民権を持たない自由黒人であるウェブ夫妻が国内はもちろんイギリスで朗読公演を敢行できたのは、ストウが関係各方面に依頼状を出していたことと、ストウ自身が『アンクル・トムの小屋』出版以来培ってきたイギリス貴族とのコネクションを生かして、彼らに二人の庇護を要請していたからである。妻の公演に同伴していた夫ウェブは、イギリス滞在中に『ゲーリー家の人々』のほとんどを執筆している (Gardner 4)。

しかし、執筆以上に困難であったのは、出版であった。『ゲーリー家の人々』の出版のためには、少なくとも3人の白人が関わっている。一人は、ウェブの妻を支援していたハリエット・ストウであり、もう一人は序言を書いたイギリス貴族ヘンリ・ブルム男爵、最後の一人は、詩人バイロンの未亡人であるノエル・バイロン卿夫人であった。ウェブはバイロン夫人にこの小説を献呈してい

る。イギリスの二人の貴族は、彼らに課せられた社会貢献のひとつとして長く奴隷制廃止問題に関わっていた。こうしたイギリス貴族の後援の下、『ゲーリー家の人々』はようやく出版の日の目を見たのである。

『ゲーリー家の人々』の評価

『ゲーリー家の人々』の評価は大きく二分されるが、アンテベラムの黒人小説の中では最も優れているという点では多くの批評家達の一致するところである (Golemba 129)。また、Addison Gayle, Jr. は1853年から1900年までに書かれた黒人小説の中で最高のものだと述べている (Levine 352, Otter 110)。しかし、長い間『ゲーリー家の人々』は、アンテベラムの黒人小説の中では、最も顧みられない小説であった。その原因のひとつを出版当時のロンドンの書評に見ることができる。1857年の*Sunday Times*は「この作品では、どうしたら奴隷制度を終結に導けるかという問題が一切触れられていない。これは甚だ遺憾である」と述べている (Duane 201)。それから130年後の1987年になっても、Bernard Bellは「この作品には、奴隷制度への批判がどこにもない」と言い、また、Blyden Jacksonは「黒人がアメリカに必要なことは金持ちになることだという理論だけで、人種差別のことは一切無視している」と非難している。確かに、アンテベラムの黒人小説が何らかの形ですべて奴隷制度を描いているのに対して、『ゲーリー家の人々』は北部の自由黒人の生活だけを描いている。1850年に逃亡奴隷法が制定され、それ以後、新たに獲得した領土に対して奴隷制を拡張するかどうかに関して国会が紛糾してきた1850年代後半に、知的黒人層から奴隷制問題について一言もない文学作品が出たことが不評の根源にあったと言われている。

しかし、批評家達に馴染まない最も大きな理由は、Anna Mae Duaneが言っているように、この作品が、読者の、特に白人読者の期待に反しているからだと思われる。

As Claudia Tate has argued, literature relating “other stories about the desire of

black subjects that do not fit the Western hierarchical paradigm of race as *exclusion, vulnerability, and deficiency*" (emphasis added) have repelled both white and black critics who are unsure how to place such stories in the African American canon. (201)

事実、作者の名前しか分からない状態で作品を読んだHugh Glosterは、「作者は白人かもしれない」(Davis 28)と述べている。惨めな奴隷の生活も描かず、北部で貧困に喘ぐ自由黒人も描かないこの作品は、代わりに、「排除もされず、弱者でもなく、すべてに不足している状態にもない」フィラデルフィアの黒人社会を描いている。『ゲーリー家の人々』は、いわゆる白人社会、あるいは、白人ヘゲモニーの価値観に染まった人々には受け入れがたい、黒人小説らしくない小説であった。

自主独立の黒人共同体の構築

アンテベラムの黒人小説はそれ以前から書かれていた奴隷体験記と、大西洋の両岸で流行していた白人大衆小説が生みの親である (Graham 18)。当時、イギリスでは産業革命時における下層労働者階級の窮状を告発する抗議小説が流行していて、センチメンタリズムを特徴としていた (Devries 241)。『ゲーリー家の人々』は、こうした同時代的な要素を多分に含みながら、単純な抵抗小説でも感傷小説でもない黒人ナショナリズムを謳う小説を創りあげている。差別と暴力を受け続ける黒人達がひとつの独立した集団組織、しかも、彼らを圧倒的な格差で取り巻き、かつ経済的、心理的に搾取し貶める白人社会に対抗するに値する、小さいとは言え奇妙な社会をフィラデルフィアに作り出しているのである。

作者ウェブが、このような社会を造り上げた理由は、ストウの序文にある。

The book which now appears before the public may be of interest in relation to a question which the late agitation of the subject of slavery has raised in many

thoughtful minds; viz. — Are the race at present held as slaves capable of freedom, self-government, and progress? (Webb xix)

この「黒人種の独立・自治・向上」という能力に関しては、ずっと以前からアメリカ黒人に投げかけられてきた疑問であり、疑念であった。デイヴィド・ウォーカーが19世紀で最も過激な白人批判と言われる「訴え」（1829年）を書いた動機は、トマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚え書き』（1787）に対する長い反論であった。すなわち、「最初から違う人種だったのか、それとも、時間や環境の変化で異なってしまったのかは分からないが、黒人種というのは肉体的、精神的資質が白人より劣るのではないだろうか？」（Garnet & Walker 22）というジェファソンの疑問である。ウォーカーは、それを論駁するに足る教養と認識を黒人自身が持つように訴えていた。誰もが暗黙のうちに否定していた黒人種の自治、独立、向上の可能性を完璧に証明したのが『ゲーリー家の人々』であった。

南部の豊かな食卓から北部の暴動の街へ

物語は、南部ジョージア州の農園での豊かな食事風景から始まる。

It was at the close of an afternoon in May, that a party might have been seen gathered around a table covered with all those delicacies that, in the household of a rich Southern planter, are regarded as almost necessities of life. In the centre stood a dish of ripe strawberries, their plump red sides peeping through the covering of white sugar that had been plentifully sprinkled over them. (Webb 1)

これに続いていくつもの高級料理が列挙される。この作品に於いては、食事の華やかさによって生活の豊かさが示される。裏を返せば、食卓の差が人種の差であり階級の差であった。食卓を囲んでいるのは、一人の客人とゲーリー家の人々である。主人のゲーリーはジョージアでも由緒のある農園の持ち主で、豊

かな食卓は彼の財力の証明でもあった。傍らには内縁の妻で元奴隷のエミリと二人の間の子ども、クラレンスとエムが座っている。何不自由のない生活を送っているとは言え、母子の法的な身分は奴隷であった。従って、厳密には、この食卓を囲むゲーリー家の人々は複数ではない。主人のゲーリー一人である。彼に万が一の事態が生じれば、残された家族は奴隷として競売にかけられ、母子の離散は確実であった。このことを嘆いた妻が夫に懇願した末に、奴隷制度のない北部のフィラデルフィアに一家が転居するところから物語は新しい展開をみせる。知り合いのいない彼らを支援するのは、エミリと同郷で自由黒人のエリス一家である。チャーリー・エリスは腕のいい大工で、妻のエレンと長女のエスタ、次女のキャディ、そして長男のチャーリーと一家をなし、堅実な家庭を営んでいる。しかし、白人家庭に比して一家は貧しく、キャディが家事一般を引き受け、母とエスタが裁縫で家計を助けている。長男のチャーリーは学校をやめて、母が若い頃仕えていたお屋敷で召使いをしている。冒頭のゲーリー家の食卓とは対照的に、エリス家の食卓はパンと紅茶が並ぶだけの質素なものである。ウェブが描くフィラデルフィアの自由黒人達は、しかし、誰が見ても勤勉でまじめで労働をよくし、家族の情愛に溢れている。勤勉でもまじめでもなく、酒浸りの生活を送っているのは、むしろ、この社会を牛耳っている悪徳弁護士や、闘鶏や投機に明け暮れる名ばかりの上流階級の紳士、それに多くのアイルランド移民である。教養や作法に至っては、自由黒人と白人との間にほとんど差はない。この作品では、むしろ、肌の色が濃いほど道徳心が強く描かれているのである。

フィラデルフィアは呼称を「友愛の街」とも言い、当初から、宗教的にも人種的にも寛容を旨とする気風があった。奴隷制度を完全に廃止した最初の州がペンシルベニアで1780年のことであったが、当時の州都はフィラデルフィアであった。この街に、1833年、アメリカ反奴隷制協会が設立されたのは自然の成り行きとも言えるが、それからというもの、奴隷制廃止論者や豊かな自由黒人を狙った白人暴動が勃発するようになった。この作品でも、悪徳弁護士スティーヴンスは黒人居留区から黒人達を追い出して、その跡地を再開発し、莫大な利益を上げようと画策していた。そして、ある日、アイルランド系の下層

労働者達を扇動して、黒人居留区を襲撃させるのである。

この襲撃計画を事前に察知したのが、ゲーリー家の人々のもう一人の友人ウォルターズである。彼は自分の屋敷が暴徒の標的となっていることを知ると市長に警備を要請するが、管轄外を理由に警察の配備を拒否されてしまう。そこで彼は、豊かな白人でさえもこれほどの邸宅を構えることは不可能という自分の屋敷を要塞に変える。彼の家には、エリス家の人々の他にも大勢の自由黒人達が援護にやって来る。彼らは、銃を持ち松明を掲げながら怒濤のように押し寄せる白人暴徒達に投石と唐辛子入りのお湯という原始的な武器で立ち向かい、潰走を余儀なくさせる。物語の核心部分を担うこの暴動場面はフィラデルフィアの貧しい自由黒人達の団結力を表現し、官憲の協力がなくとも自衛に成功し、やがては自立も可能なことを予見している。

自由黒人達の司令部とも言えるウォルターズ邸は、指導者としての彼の稀な能力によって白人達の攻撃に耐えることができた。一方、暴徒達は、スティーヴンスの指示で、返す足でゲーリー家へと向かった。人種を越えた婚姻は汚らしいものというのが当時の白人の認識であり、また、異人種間結婚をする人間は反奴隷制主義者とみなされていた。19世紀に移民を増やしていたアイルランド人は白人社会では貧困層を形成し、自由黒人と職場を奪い合っていたこともあって、彼らにゲーリー家の人々を襲わせるのは容易であった。しかし、これらは表向きの理由であって、実際のところは、従兄弟に当たるゲーリーを殺害して彼の財産を奪うことがスティーヴンスの本来の目的であった。玄関先で暴徒達と対峙したゲーリー氏は瞬時に射殺され、裏庭に隠れた妻エミリは流産の末に自らも凍死してしまう。両親の悲惨な最期を目撃した二人の遺児は、それぞれ別々の人生を歩むことになる。肌の白い二人の子どものうち、娘のエミリは黒人社会で黒人として生きていくことになり、息子のクラレンスは、さらに遠い北部で白人として生きる決定がなされる。

ここまでの展開を見れば分かるとおり、この物語の中心にいるのは、実は、ゲーリー家の人々ではない。作者ウェブが描きかかったのは、大方の読者の予想に反する自由黒人達の精神的な強靱さと結束力であった。その要となっているのが、フィラデルフィアの黒人社会で最も尊敬されているウォルターズであ

る。その意味では、ゲーリー家の人々もエリス家の人々も脇役に過ぎない。作者がこの作品を描くにあたって、同時代の読者に媚びなかった姿勢の一端をウォルターズの人物像に見ることができる。彼はあらゆる点で白人社会が想定する黒人像ではないのである。第一に、これまでの多くの奴隷体験記や初の黒人小説と言われる *Clotel* (1853年) などの主人公がムラートであることが多かったのに対して、ウォルターズの肌は漆黒であった。加えて、本来自由黒人は貧困が暗黙の前提であったが、彼はこの町の誰よりも豊かな資産家として描かれる。また彼は、白人達の横柄な態度や非礼や侮辱や差別に対しては、常に昂然と抗議をしている。アンクル・トムのように白人社会のシステムや法に諾々と従う弱々しい黒人ではなかった。暴徒達と闘う彼の姿は、彼の屋敷の応接間に掛けてある、ある黒人将校を彷彿とさせる。

As he was leaving the room, he stopped before the picture which had so engaged his attention, when Mr. Walters entered.

“So you, too, are attracted by that picture,” said Mr. Walters, with a smile. “All white men look at it with interest. A black man in the uniform of a general officer is something so unusual that they cannot pass it with a glance.”

“It is, indeed, rather a novelty,” replied Mr. Garie, “particularly to a person from my part of the country. Who is it?” (123)

ゲーリー氏が思わず見とれたその将校の名前は、トゥサン・ルヴェルチュールであった。

ハイチ革命の影響

キューバの東南に位置するイスパニョーラ島は、その西側3分の1がフランス領植民地サン・ドマングであった。カリブ海の多くの島々同様、ここでは北米よりもはるかに厳しい奴隷制度のもと、モノカルチャーの栽培が行われていた。そのサン・ドマングで1791年8月14日の夜から始まった黒人暴動はや

がて、一大民主革命となった。この黒人独立運動を指揮したのが、20年ほど前に奴隷から解放されたばかりのトゥサン・ルヴェルチュールであった。闘いは凄惨を極めたが、トゥサンは1800年7月末までに全土を平定し、翌年の7月「サン・ドマング憲法」を制定、同時に「奴隷制の廃止」を掲げた。しかし、トゥサンの断行を知ったナポレオンが激怒、義弟ルクレール將軍率いる2万人のフランス軍を送りこんだ。トゥサンは1802年6月捕虜となり、大西洋を移送され、翌年4月7日フランス本国のジュラ山脈内で獄死した。トゥサンの死後、彼の意志を継いだ部下らが結束してフランス軍を破り、1804年1月、西半球で初の黒人共和国としてハイチを樹立した。同年10月、デサリーヌが自ら皇帝として即位しているが、彼に王冠を贈ったのはフィラデルフィアの商人達であり、アメリカ船「コネチカット」が運んでいる (James 370)。また、ハイチ革命が始まってから19世紀初めにかけて、何千人という白人、その奴隷、また自由黒人達がサン・ドマングからこの街に移住してきて、大きなフランス系共同体を作っている。Geggusが述べているように、ハイチ革命とトゥサンの偉業は特に、フィラデルフィアの自由黒人達を鼓舞していたことは確かである。

In Philadelphia, the site of the largest concentration of free blacks in the United States and a refuge for many whites and blacks from the French colonies, there was a deep concern over the welfare of Haiti. James Forten, the rich sail maker and black leader, explained his community's deep interest in the future of Haiti in 1817: Haiti, he said, was an example of what blacks could achieve; proof that blacks in America "would become a great nation" and they "could not always be detained in their present bondage. (8)

フィラデルフィアに生まれ育ったウェブが、ハイチ革命の記憶を反芻していたことは否定できない。なぜなら、「自由黒人にとり、ハイチ革命は政治的文化的な一里塚であった」からである (Jackson & Bacon 40)。

『ゲーリー家の人々』の後半、事態は急速に収束していく。悪漢ステイヴンスは、ゲーリー氏から奪った財産を元手に投資家となり、数十年後、巨万の

富を築いている。しかし、ゲーリー氏殺害の首謀者となったアイルランド人に脅迫され続け、最後は、その首謀者の自白により警察に追い詰められて、ニューヨーク五番街の自宅から身を投げて自殺する。ゲーリー家の人々に関して言えば、白人として白人社会で生きてきたクラレンスは若い白人女性と恋に落ちる。しかし、結婚式まで数日というとき、人種差別主義者であるスティーヴンスの息子によって黒人であることを暴露され、恋人と引き裂かれた末に心身を病み、やがて、フィラデルフィアの妹のもとで息を引き取る。

最終的に、ウォルターズの回りからは白人や白人としてパッシングする人物が消えていた。『ゲーリー家の人々』は白人の介入しない、豊かで、完全に自立した黒人社会を描こうとする。もはや、白人の庇護も援助も必要とはしない世界を理想としているからである。こうした展開は、トゥサン死後ハイチ革命を継承した皇帝デサリーヌの言葉に共鳴している。

I repeat, take courage, and you will see that when the French are few we shall harass them, we shall beat them, we shall burn the harvests and retire to the mountains. They will not be able to guard the country and they will have to leave. Then I shall make you Independent. There will be no more whites among us.” (James 314-15)

デサリーヌはハイチの独立を宣言した後、フランス系の白人を全員虐殺した。そして、数年前、フランス国旗に制定されていた三色旗の中から白を切り裂き、青を黒人、赤は黒人と白人の混血であるムラートとし、国旗からも白人の痕跡を消し去った。

ゲーリー家の家系でただ一人残ることになるクラレンスの妹エムは、白人としてパッシングすることも可能であったが、黒人社会で黒人として育ち、やがて、幼友達のチャーリー・エリスと結婚する。スティーヴンスの富はクラレンスを経て、最終的にはすべてエムに委譲されることになる。こうして人種的にも経済的にもゲーリー家はエリス家へと吸収されていく。スティーヴンスの最期が訪れようとする前夜、物語のはじめであんなに貧しかったエリス家の人々が「典型的なアメリカ風の晩餐」と呼べる贅を尽くした祝いの席に着く(377)。

エムとチャーリーの結婚披露宴である。

Then came the supper. Oh! such a supper! — such quantities of nice things as money and skill alone can bring together. There were turkeys innocent of a bone, into which you might plunge your knife to the very hilt without coming in contact with a splinter — turkeys from which cunning cooks had extracted every bone leaving the meat alone behind, with the skin not perceptibly broken. (376)

食卓の品々はこの何倍もの長さにわたって列挙される。それは物語冒頭のジョージアでの豊かな夕食の風景が、まるで場面と人物を入れ替えて物語の終わりに再演されたかのような錯覚を覚える。白人と黒人の立場が完全に逆転したところで物語は終焉を迎える。

おわりに

奴隷制時代の黒人が自ら小説を出版することは、アメリカでは想像できないことであった。南部のほとんどの州では奴隷に読み書きを教えることは違法であったし、北部の自由黒人達さえ、高等教育機関への門は、ほんのわずかの例外をのぞき、閉ざされていた。また、たとえ執筆が可能だったとしても、出版を引き受けるようなリスクを冒す出版社はなかった。最も危険な例を挙げると、ウォーカーの「訴え」は、著者自ら印刷し、ボストン港に停泊中の船で働く黒人水夫に託したものである。その水夫達は南部の港に寄港したときに「訴え」のパンフレットを土地の黒人達に渡していたのである。古着業を^{なりわい}生業としていたウォーカーは、古着のズボンのポケットにパンフレットを縫い付けて、それを水夫達に安価で売っていたのである。しかし、その事実が発覚してもなく、ウォーカーは不審な死を遂げた。黒人文学の出版は政治的に危険な行為であった。そのため、多くがイギリスで出版されたり、奴隷制廃止主義を標榜する雑誌などに連載されたりしたのである。

『ゲーリー家の人々』が想定していた読者は、もちろん、白人読者であった。

白人達に本当の自由黒人の姿を知らせたいという作者の意図がこの作品には一貫して感じられる。もちろん、Devriesの批判を待つまでもなく、この作品が「フィラデルフィアの自由黒人を忠実に表現していたかどうかは怪しい」(249)。ウォルターズもエリス家の人々も当時の自由黒人の典型ではなかったであろう。しかし、ベセル教会ほか、学校、読書サークル、道徳向上運動協会、メイソン協会、節酒運動協会ほか、黒人達独自の多くの施設や教育機関が存在したことは事実である。また、1845年の統計によれば、フィラデルフィアの黒人住人は経済状態がよく、数十人の富裕層の中に、6人の黒人が含まれていたとある (Levine 350)。その中の一人はロバート・フォーテンであったと思われる。彼の父、ジェイムズ・フォーテンは自由黒人の身でありながら製帆業者として成功し、1842年に死亡するまでフィラデルフィアばかりか合衆国で最も豊かなアメリカ人の一人であった。また、黒人の権利を獲得するために私財を投じ、あのアメリカ反奴隷制協会を自分の屋敷で発足させている。ウェブの兄(弟)の妻はロバート・フォーテンの妻と姉妹関係であったため、ウェブはフィラデルフィアでも有名な奴隷制廃止論者の家と密接な関係があった (Gardner 3)。デュボイスの言う「ダブルコンシャスネス」を持つことに「ノー」と言い (DuBois 364-65)、白人と黒人の立場が逆転するような社会の到来を小説にしたのは、ウェブがそれだけ時代を先取りする作家だったからだとは言えないだろうか？

1997年版の『ゲーリー家の人々』に序言を書いたRobert Reid-Pharrは、ウェブにとって奴隷制との闘いの場所、すなわち砦は黒人達の家庭であった、という言い方をしている (xi)。つまり、それはウォルターズ家であり、エリス家であったということである。一地方都市の名もない自由黒人の家庭を描いた『ゲーリー家の人々』は、ダグラスの*The Heroic Hero*のような、またディレイニーの*Blake*のような暴動や革命による制度の転覆ではなく、白人社会の懐深く潜み、着々とかつ密かに人種差別の白人社会概念を覆していく過程を描いている。トゥサンの革命への意志は、この作品においては非暴力と不服従の闘いへと方向転換をしたのである。この闘いの方が、ずっととらえどころのない恐怖感を白人読者に与えたし、現在もなお与え続けているのではないだろうか。

*本稿は2009年4月の名大英文学会での口頭発表を修正し加筆したものである。

参考文献

- Davis, Arthur P. "The *Garies and Their Friends*: A Neglected Pioneer Novel." *CLA Journal* 13, no. 1 (1969) 27-34.
- Delany, Martin. *Blake or The Huts of America*. Boston: Beacon Press, 1970.
- Dervies, James H. "The Tradition of the Sentimental Novel in *The Garies and Their Friends*." *CLA Journal* 17, no. 2 (1973): 241-249.
- Du Bois, W. E. B. *The Philadelphia Negro: A Social Study*. 1899. U of Pennsylvania P: Philadelphia, 1995.
- Duane, Anna Mae. "Remaking Black Motherhood in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*." *African American Review* 38, no. 2 (2004): 201-212.
- Gardner, Eric. "A Gentleman of Superior Cultivation and Refinement: Recovering the Biography of Frank J. Webb." *African American Review*. Summer, 2001. 1-22.
- Garnet, Henry Highland & David Walker. *Walker's Appeal, with a Brief Sketch of His Life, and Also Garnet's Address to the Slaves of the United States of America*. Dodo Press: New York, 1848.
- Geggus, David P, ed. *The Impact of the Haitian Revolution in the Atlantic World*. Columbus, South Carolina: U of South Carolina P, 2001.
- Golemba, Henry. "Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends* Contextualized within African American Slave Narratives." *Lives Out of Letters: Essays on American Literary Biography and Documentation, in Honor of Robert N. Hudspeth*. Ed. Robert D. Habich. Madison: Fairleigh Dickinson University Press, c2004. 114-142.
- Graham, Maryemma, ed. *The African American Novel*. NY: Cambridge UP, 2004.
- Hunt, Alfred N. *Haiti's Influence on Antebellum America: Slumbering Volcano in the Caribbean*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1988.
- Jackson, Maurice & Jacqueline Bacon, eds. *African Americans and the Hatian Revolution: Selected Essays and Historical Documents*. NY: Routledge, 2010.
- James, C. L. R. *The Black Jacobins: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*. New York: Vintage Books, 1989.

- Lapsansky, Phillip. "Afro-Americana: Frank J. Webb and His Friends." *Annual Report of the Library Company of Philadelphia for the Year 1990*. Philadelphia: Library Company of Philadelphia, 1991. 27-43.
- Levine, Robert S., ed. *Clotel; or, The President's Daughter: A Narrative of Slave Life in the United States*. New York: MacMillan, 2000.
- Nash, Gary B. "Reverberations of Haiti in the American North: Black Saint Dominguans in Philadelphia." *Pennsylvania History* 65(5) (special supplementary issue). 1998: 44-73.
- Otter, Samuel. "Philadelphia Experiments." *American Literary History* 16, no. 1 (2004): 103-116.
- Peterson, Carla L. "Capitalism, Black (Under) Development, and the Production of the African American Novel in the 1850s." *American Literary History* 4, no. 4 (1992): 559-583.
- Said, Edward W. *Culture & Imperialism*. London: Vintage Books, 1994.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin or Life among the Lowly*. New York: Penguin Books, 1981.
- Webb, Frank J. *The Garies and Their Friends*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1997.
- . "Biographical Sketch." London: Sampson, Low, Son, and Co., 1856 (<http://www.iath.virginia.edu/utc/uncletom/xianslav/xsesfjwat.html/>).
- Wilson, Kirt H. "The Racial Politics of Imitation in the Nineteenth Century." *Quarterly Journal of Speech*. 89, no. 2 (2003): 89-108.
- 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波新書 1965.

Synopsis

Black Nationalism in the Antebellum Black Novel:
The Influence of the Haitian Revolution on *The Garies and Their Friends*
Suzuko Shindo

In recent decades, black novels written before the Civil War have been newly reprinted. Most of the authors were free or fugitive blacks. Before these books were rediscovered and reprinted, black people in the antebellum era could not be called a nation in the sense alluded to by Edward Said, “nations themselves are narrations.” Among the black novels, Frank J. Webb’s *The Garies and Their Friends* published in London in 1857 is unique in that it does not describe any problems or pain arising from southern slavery. Actually, it is the first novel that portrayed the life of free blacks in the North. The novel had not come into notice until it was reprinted in 1969 in the US, where there was only one copy available at the time. My aim here is to provide evidence that under the surface of common city living there is strong black nationalism similar to the policies of the black warriors of the Haitian Revolution.

The Garies is “a family of peculiar construction” made up of a white plantation owner, his mulatto wife and their two children, the latter three assumed to be slaves in the eyes of Georgian law. To secure the liberty of his family in the North, Mr. Garie decides to move to Philadelphia at the time of mounting anti-abolitionist sentiment. Strange as it may sound, the central figures are not the Garies but the city’s black community who resist the violence and blatant racial discrimination and finally overcome incredible odds. During a violent riot, Walters, a black millionaire, behaves like a spiritual pillar of Philadelphia free blacks. Walters represents Toussaint L’Ouverture, an ex-slave who led a nation-wide slave revolt and greatly contributed to the elimination of slavery and the establishment of Haiti as the first republic ruled by people of African ancestry.

As a legal guardian, Walters dares to determine the future of the Garie

children after their parents were driven to death by a white mob, making the daughter live as a black and the son pass as a white. The son dies of tuberculosis after a long period of suffering due to the separation from his white fiancé and a broken heart caused by his childhood friend's revelation of his identity as a black. At the end of the story, most of the white characters disappear from Walters' society. The last Garie, Emily, marries the son of a black family and inherits immense wealth and property. The fortune had been amassed through the exploitation of slave labor on the Georgian plantation and further increased by the man who killed Mr. Garie. Economic standing between the white and black characters came to be completely reversed.

What Webb did in the novel was unbelievably radical in that it affirms the coming of the age when free black people succeed in living a life of "freedom, self-government and progress," dismissing the doubt expressed in the preface written by Harriet Beecher Stowe. An unforeseen twist in the novel is that the main white characters are banished from Walters' society, reminding us of the fact that Haiti cast out or slaughtered all the white colonists after it achieved independence. *The Garies* had no choice but to appeal to a white readership when most black people were forbidden to read and write. It is a tacit but bold challenge to the status quo for Webb to create a rich black community in the middle of white hegemony.